

私と電子情報通信学会

四国支部長 中野好典



「学会とは？」との問いに対する答えは何だろうか。人さまごまの回答が予想されるが、現在のように研究テーマや専門知識が多様化、細分化されてくると、議論をより有益に、効率良く進めるためには、組織構成はコンパクトな方が有効になることも多い。現在、学会と呼ばれる組織は1,000を優に超え、多くの研究開発者が複数の学会に所属しているのが実情である。私自身にとっての「学会とは何か？」について考えてみる。

私が本学会に入ったのは30数年前で、企業の研究所において通信用半導体レーザの開発研究に従事していた。光ファイバ通信システムが実用化に近い時期で、該テーマはまさにホットの研究課題であり、全国大会では毎回、数百人収容の大教室が満員の盛況であった。会場の前列付近には企業や大学の一流の研究者の方々が陣取られ、厳しい質問を容赦なく浴びせ、ノウハウに関する質問に答えられず、立ち往生する新人研究者も珍しくなかった。ただ、会場には、どこの研究機関の所属であっても、若い技術者を育成するという共通認識にあふれており、若い登壇者もまた、半年間の成長の様子を見てもらえるように精進していたことが伺えた。やがて数年の経験を積むと丁々発止とやり取りできるようになり、物理現象に対する洞察力や解析力、実用化に向けた企画力など、研究者としての基本素養を講演発表会を通して涵養した例を数多く目にできた。

昨今の総合大会やソサイエティ大会では、セッションによっては大学の研究室や企業の一部門で独占されているような場面に遭遇する。特に、支部の連合大会などでは聴講者が少ないこともあって、まるで大学研究室の成果発表会の趣さえ感じられる。教育機関によっては卒業規定や修了規定に学会発表を義務付け、プレゼンテーション技術の修得の場として活用している向きもあり、仕方がないかもしれない。ただ、企業に所属する会員の発表が少なく、会場での議論は低調になり、社会に出て間もない若い技術者の修養の場として活用できていないのは残念である。

一方、地域における講演会や研究会の開催件数は増える傾向にあり、支部役員の仕事量は増加している。支部役員の多くは、企業や大学などの所属する組織において働き盛りの中堅の技術者・研究者であり、学会活動はボランティアで頑張っている。活動の成果として、地域の研究者との交流が深まり、緊密な人脈を形成できれば問題はないが、実際は個々の作業依頼に終始することが多い。特に、連合大会の主催学会ともなると準備は大変で、もはやボランティア活動の域を超えてしまう。学会主催のイベントの多くは恒例化し、毎回つつがなく運営されるのが、当然のように受け取られているが、学会運営に関しては、ひとえに役員の方々の御尽力のお陰であり、改めて感謝しなければならない。多くの支部役員経験者が年齢を経るに従い、素晴らしく成長され、社会的にも大きな信頼を得ているのは全くの救いである。

今後、本学会もその形態を変えていくのは必須であるが、日本が技術大国として発展を続けていく上では、産業界を支える次世代の技術者を育成するという本学会の使命を完遂することが肝要であり、このための活動を衰退させてはならない。組織の活動強化はボトムアップが有効で、新法人に移行したとしても、支部段階の活動強化が不可避である。どこの支部にも、地域の学術振興のために骨身を惜しまず活動してくれている中堅技術者の方々がいる。彼らが力尽き、あきらめないように、特に、年齢がいったベテラン技術者も、本学会の振興のために何か学会貢献できることを見つけて、協力しようではありませんか。